

特集 3

久万高原町面河地区における 自家用有償旅客運送について

だんだんおもご事務局長 重見 文典



面河地区の概要

面河地区は仁淀川の源流に位置する自然豊かな地域で、面河溪谷や石鎚山といった全国的に誇れる観光地があります。

平成16年の合併により久万高原町の一部



面河溪谷の様子

となり、150平方キロメートルを超える広大な土地に400人余りの住民が居住しています。高齢化も年々進み、地域の高齢化率は60パーセントに迫っています。

面河地区地域運営協議会（だんだんおもご） 設立の経緯

合併時には900人近かった人口も、令和6年1月31日現在では半数以下の436人にまで減少しました。

中央の機能を有していた面河村庁舎は面河支所となり、当時40名いた職員は現在4名で業務に当たっています。行政環境の変化に戸惑い、地域のことを地域で決められない場面も多くなり、人口減少や高齢化、インフラの衰退など、身近な課題も重くのしかかります。

閉塞感のある現状を打破し、ふるさと面河を後世に残したい。そのような危機感と想いが地域住民の中で芽生え始め、合併から4年が経過した平成20年頃から地域の



だんだんおもごシンボルマーク

有志を中心に小さな取り組みが始まりました。

活動の輪は次第に大きくなり、平成28、29年度には地域全体を巻き込んで町の社会福祉協議会主催の「地域支えあい応援セミナー」や役場面河支所主催の「おもごの新しい物語事業」が実施されました。これらの事業を通じて、集いの場、話し合いの場が構築され、地域の未来について議論する環境の下地が生まれました。なお、現在活動に参加している住民の多くは、これらの事業を通して集まってくれました。

地域の機運が徐々に高まりを見せる中、地域住民たちで地域のことを決めることを決めて運営する組織「面河地区地域運営協議会」が平成30年4月1日に誕生しました。現在では、地域の方言で「ありがとう」



総会の様子

という意味である「だんだん」を用い、「だんだんおもご」という愛称で呼ばれています。

現在は総務・福祉・観光・交通・清流面河の5つの部会が面河地区の生活課題の解決に向けてそれぞれ独自の活動を展開していますが、今回は交通部会の活動を中心に報告させていただきます。

自家用有償旅客運送事業への取り組み

面河地区は独居老人が多く住宅が点在しており、面河地域にはタクシー事業所もなく通学生の減少に伴うバス路線の縮小も続いています。そのような中、交通部会では公共交通空白地の移動手段確保に向けた取り組みを進めました。

平成29年に地域でアンケートや座談会を行った結果、「家から最寄りのバス停まで安価な移動手段があれば利用してみたい」とのご意見を多数いただき、住民による交通空白地の輸送活動について社会実験を行うことが決まりました。

平成30年12月から始まっ



輸送車両(ももんが号)出発式の様子

た社会実験では、対象を交通空白地からの通院や買い物としました。

利用区域は町内施設や東温市の横河原駅までとし、原則3日前までの予約、公用車を用いて実施しました。

また、運転手を務めた住民15名には事前に講習会を受講していただきました。

社会実験の結果、5月までに延べ65人が利用され、利用者からはたくさんの喜びの声が聞かれました。私自身も運転を担当した時はとても緊張しましたが、利用者さんの笑顔を見ると緊張も解け、輸送活動を始めて良かったと感じました。

社会実験の中で、運転手からはルートへの検討や凍った道路の対応など様々な意見が出ました。円滑な運用に向けた協議を重ねた結果、令和元年6月から本格運用となりました。

思いやりあふれる移動手段を目指して

事業の本格運用が始まって5年が経過しました。運転手の定年制や利用ルートの延伸、園児、児童送迎等、様々な課題はあり



地域座談会の様子

ましたが、関係者の皆様のご支援、ご協力のおかげで、何とか無事に事業が継続できており、地域における事業の浸透にも手応えを感じています。

最後になりますが、面河地域は思いやりにあふれた本場に素晴らしい地域です。今後も様々な課題が出てくると思いますが、できる限り利用者の意向に沿えるように検討・改良を重ねながら、面河らしい思いやりにあふれた移動手段として地域に定着していけるように頑張っていきたいと思います。



輸送活動の様子



輸送活動安全講習会の様子